

令和8年産水稻現地指導会（2回目）資料

令和8年7月4・5日

J Aしまね斐川地区本部 営農第一課

1. 生育調査結果

品種名	移植日	調査日	調査地点	株/坪 (株間)	茎数 (本/株)	茎数 (本/m ²)	草丈 (cm)	※葉色 (葉色板)	葉齢 幼穂 3 mm	幼穂 形成期
つや姫	4/27	6/30 (+64)	伊波野	60 株 (18 cm)	29.9	553.7	70.7	44.8 (6.0)	10.8 幼穂 3 mm	6/27
つや姫	4/30	6/30 (+61)	出東	50 株 (21 cm)	33.9	538.1	66.4	38.8 (4.8)	10.2 幼穂 2 mm	6/30
つや姫	5/2	6/30 (+59)	出東	60 株 (18 cm)	27.4	507.4	70.2	39.0 (4.9)	10.1 幼穂 2 mm	6/29
つや姫	5/4	6/30 (+57)	出東	45 株 (24 cm)	32.6	452.8	69.1	43.1 (5.7)	10.6 幼穂 2 mm	6/30
コシヒカリ	5/19	6/30 (+42)	出東	45 株 (24 cm)	27.6	383.3	57.4	39.0 (4.9)	8.8	-
きぬむすめ	5/17	6/30 (+44)	荘原	60 株 (18 cm)	23.1	427.8	55.3	41.3 (5.3)	9.9	-
きぬむすめ	5/31	6/30 (+30)	伊波野	60 株 (18 cm)	17.0	314.8	45.6	40.5 (5.2)	8.6	-
きぬむすめ	6/10	6/30 (+20)	出東	50 株 (21 cm)	5.0	79.4	32.6	36.6 (4.4)	6.6	-

※葉緑素計（SPAD）による値：平均値×0.2-2.9=葉色板の数値

《つや姫》

初期生育は緩慢であったものの、5月中旬以降気温が高く推移したため生育は回復し、茎数は多く、葉色は平年並み、葉齢は進んでおり、生育進度はやや早くなっています。

4月末～5月上旬植えは、幼穂形成期に入りました。

5月中旬植えも幼穂形成期を迎えています。体系施肥の場合、穂肥時期となります。

《コシヒカリ》

茎数はやや多く、葉色は平年並み、葉齢は進んでおり、生育進度はやや早くなっています。

5月20日植えは、間もなく幼穂形成期に入り、穂肥時期となります。

品質向上や倒伏防止のため、生育に応じた肥培管理を行いましょう。

《きぬむすめ》

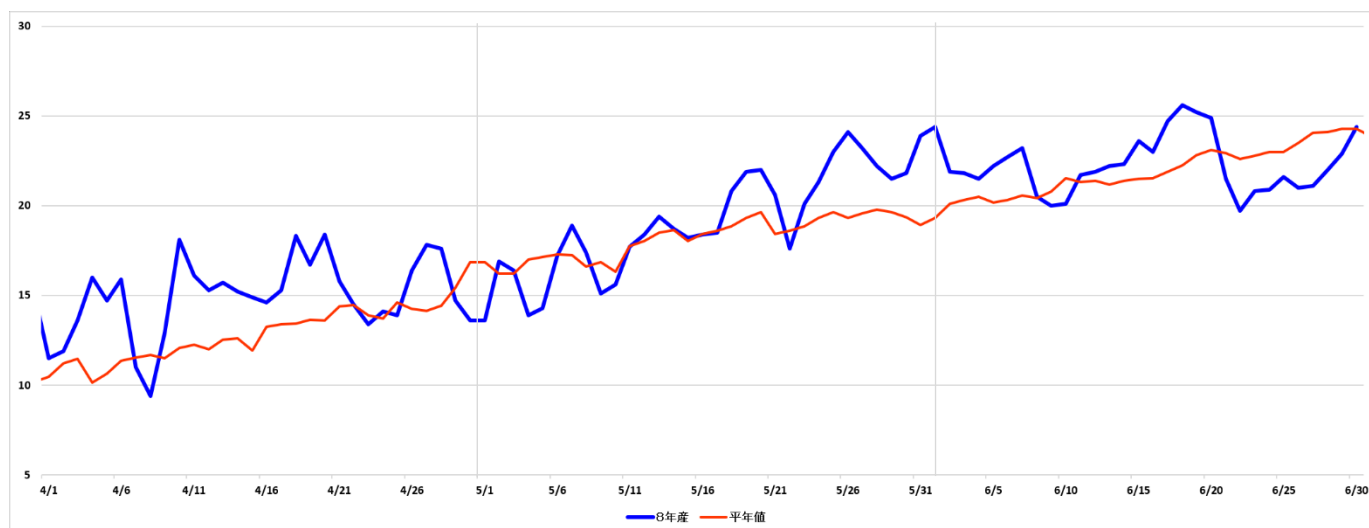
茎数はやや多く、葉色は平年並み、葉齢は進んでおり、生育進度はやや早くなっています。

5月下旬植えは、最高分けつ期を迎えます。

急激に茎数が増加する時期なので、中干しを実施していない場合は早急に実施しましょう。

また、葉色などの生育を確認し、今後の肥培管理を進めましょう。

令和8年産稲作期間 斐川平均気温推移（4月～）



※データ観測地点：斐川 ※平年値：2003～2022年の斐川の平均

当面の管理について

3か月予報（6月23日広島地方気象台発表）では、7月8月の気温は、高い確率60%です。高温が続く場合、以下の点に注意しましょう。

1. 適切な水管理

- 現在、中干し中のほ場では、強い中干しに注意しましょう。干し過ぎによる大きなヒビ（亀裂）が入ると、湛水が思うようにできなくなります。小ヒビが入ったら適度に入水し、間断かん水を心がけましょう。
- 穂ばらみ期～出穂期は、最も水が必要な時期になるため湛水管理を行いましょう。
- 穂揃い期以降は、間断かん水や飽水管理に移行しできるだけ収穫近くまで続けましょう。
- 水不足（用水制限）になった場合は、「節水」に努めましょう。

2. 病虫害の適期防除

- 高温で好天が続くとカメムシ類の活動が活発となり、出穂した水稻への飛来量が多くなります。基幹防除の徹底を図りましょう。

3. 適切な肥培管理

- 高温で好天が続くと急激に葉色が褪める場合があります。
特に、「きぬむすめ」は生育期間が長く、基肥一発型肥料が切れることも想定されます。
7月下旬8月上旬に葉色が淡くなった場合は、追肥を実施しましょう。（P-5参照）
ほ場を良く見て回り、葉色に応じた肥培管理を徹底しましょう。

2. 穂肥の施用

【つや姫】

肥料名	施用量	施用時期	備考(目安)
げんき2号	20 kg	幼穂長 1~2 mm (出穂 25 日前)	4 月下旬植え: 6 月 27 日頃 5 月上旬植え: 6 月 30 日頃 5 月中旬植え: 7 月 4 日頃

※「げんき2号」以外は使用できません。

※葉色が葉色板で 5.0 (SPAD 値 40) 以上の濃い場合、施用時期を遅らせたうえに減肥しましょう。
(幼穂長 5~10 mm (出穂 20~15 日前) にげんき2号 10~15 kg/10a)

○基肥一発型肥料 (OK有機入り一発) の場合

原則、穂肥の必要はありません。

ただし、幼穂形成期頃 (7 月上旬) に、葉色板 4.0 (SPAD 値 35) 以下まで淡くなった場合は、追肥を施用しましょう。

「つや姫」に追肥を行う場合は、特別栽培米基準の範囲内 (化学肥料の窒素成分量合計が 4 kg/10 a 以下) となるよう計算して施用しましょう。

例えば・・・

基肥に OK 有機入り一発を 50 kg/10a 施用した場合、追肥はげんき2号を 8 kg/10a までの施用となります。

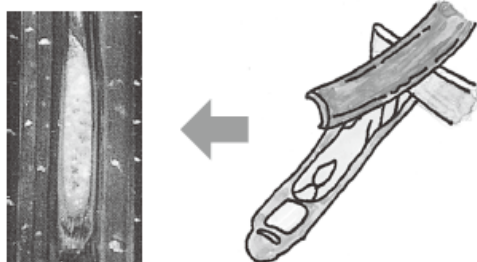
肥料名	容量	N	P	K	うち化学 N
NEW だいち	20 kg	2.0 kg	2.4 kg	1.6 kg	1.370 kg
げんき2号	20 kg	2.6 kg	0.6 kg	1.6 kg	2.206 kg
OK 有機入り一発	20 kg	2.4 kg	1.6 kg	1.2 kg	1.200 kg

○幼穂長を確認しましょう。

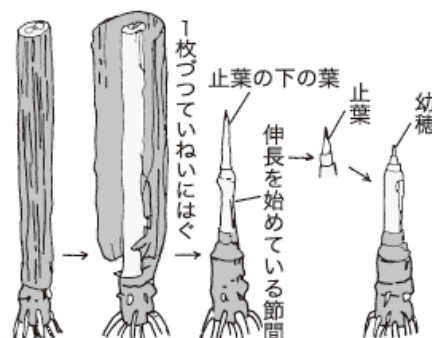
【幼穂の確認方法】平均的な株の一番背の高い茎を根元から抜き取る

(1) カッターなどで割る

(茎をうすく削いでゆく)



(2) 葉さやをむく



【コシヒカリ】

肥料名	施用量		施用時期	備考(目安)
燐加安 403	1回目	10 kg	幼穂長 5 mm (出穂 20 日前)	5 月下旬植え:7 月 13 日頃
	2回目	10 kg	1 回目の 7~10 日後	

※上記は基準量です。下記の目安を参考に茎数と葉色を確認し調整して下さい。

※高度化成 17-0-17 は、10 kgを、7 月 15 日頃(出穂 15 日前)に施用する。

○コシヒカリ燐加安 403 施用量の目安 (10a)

葉色 (葉色板)	茎数 (1 株当り)	穂肥 1 回目	穂肥 2 回目
4.0 未満	20 本未満	10 kg	10 kg
	20 本以上	無施用	15 kg
4.0 以上 4.5 未満	—	無施用	15 kg
4.5 以上 5.0 未満	—	無施用	10 kg
5.0 以上	—	無施用	無施用

倒伏防止には・・・

○第 4、5 節間の伸びる出穂 30~20 日前の肥効をおさえる。

茎数が多く葉色が濃い場合は、1 回目の穂肥の施用時期を基準より遅らせたうえに減肥するなど工夫しましょう。

○下位節間が伸びすぎている(第 5 節間 5 cm 以上、第 4 節間 10 cm 以上)等、倒伏が心配される場合は、倒伏軽減剤を施用する。

倒伏軽減剤：ミカ粒剤(2~3kg/10a、出穂 25~10 日前)

上位節間の伸長を抑制し倒伏軽減効果があります。

【きぬむすめ】

肥料名	施用量	施用時期	備考(目安)
燐加安 403	1回目 10～15 kg	幼穂長 5 mm (出穂 20 日前)	5 月中旬植え:7 月 20 日頃 5 月下旬植え:7 月 25 日頃
	2回目 15 kg	1 回目の 7～10 日後	

※上記は基準量です。下記の目安を参考に葉色を確認し施用量を調整して下さい。

※高度化成 17-0-17 は、10 kg(1 回目)+10 kg(2 回目)の合計 20 kg

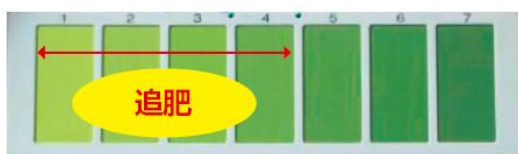
※「きぬむすめ特別栽培米」の場合、「げんき」を施用する。

○きぬむすめ燐加安 403 施用量の目安 (10a)

葉色 (葉色板)	穂肥 1 回目	穂肥 2 回目
4.0 未満	15 kg	15 kg
4.0 以上 5.0 未満	10 kg	15 kg
5.0 以上 5.5 未満	無施用	10 kg
5.5 以上	無施用	無施用

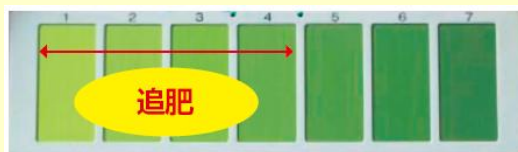
(つなぎ肥)

7月上旬に、葉色板で4.0 (SPAD 値 35) 以下まで淡くなった場合は、燐加安 403 10kg/10a つなぎ肥を施用する。



○基肥一発型肥料 (ツバメコート SLH20、ふるさと 588) の場合

7月下旬～8月上旬に、葉色板で4.0 (SPAD 値 35) 以下まで淡くなった場合は、燐加安 403 10～15kg/10a 施用する。



3.病害虫防除

◎重点項目：「イネカメムシ」の徹底防除

イネカメムシは基部斑点米を発生させ品質低下を招くほか、出穂期に籾の基部を加害することにより不稔粒を発生させ減収となります。

基部斑点米は色彩選別機ですべて取り除くことはできません。また、共同乾燥施設を利用される方も品位が低下し、結果として推定玄米重量が下がります。

基幹防除を徹底し発生密度を下げることで反収・品質向上に繋がります。



イネカメムシ
体長：12～13 mm
黄褐色

Q. イネカメムシって？

- A. ・若い穂を好むため、**出穂期に多数が侵入する。**
 ・出穂した水田に越冬場所から**直接飛来する。**
 ・名前のおり「**稲**」にしか飛来しない。
 ・夜に活動が活発になる。**日中は株元に潜んでいる。**
 ・出穂直後に小穂軸を刺し**不稔**となる。⇒**減収**
 ・籾の基部を刺すと**基部斑点米**となる。⇒**品質低下**



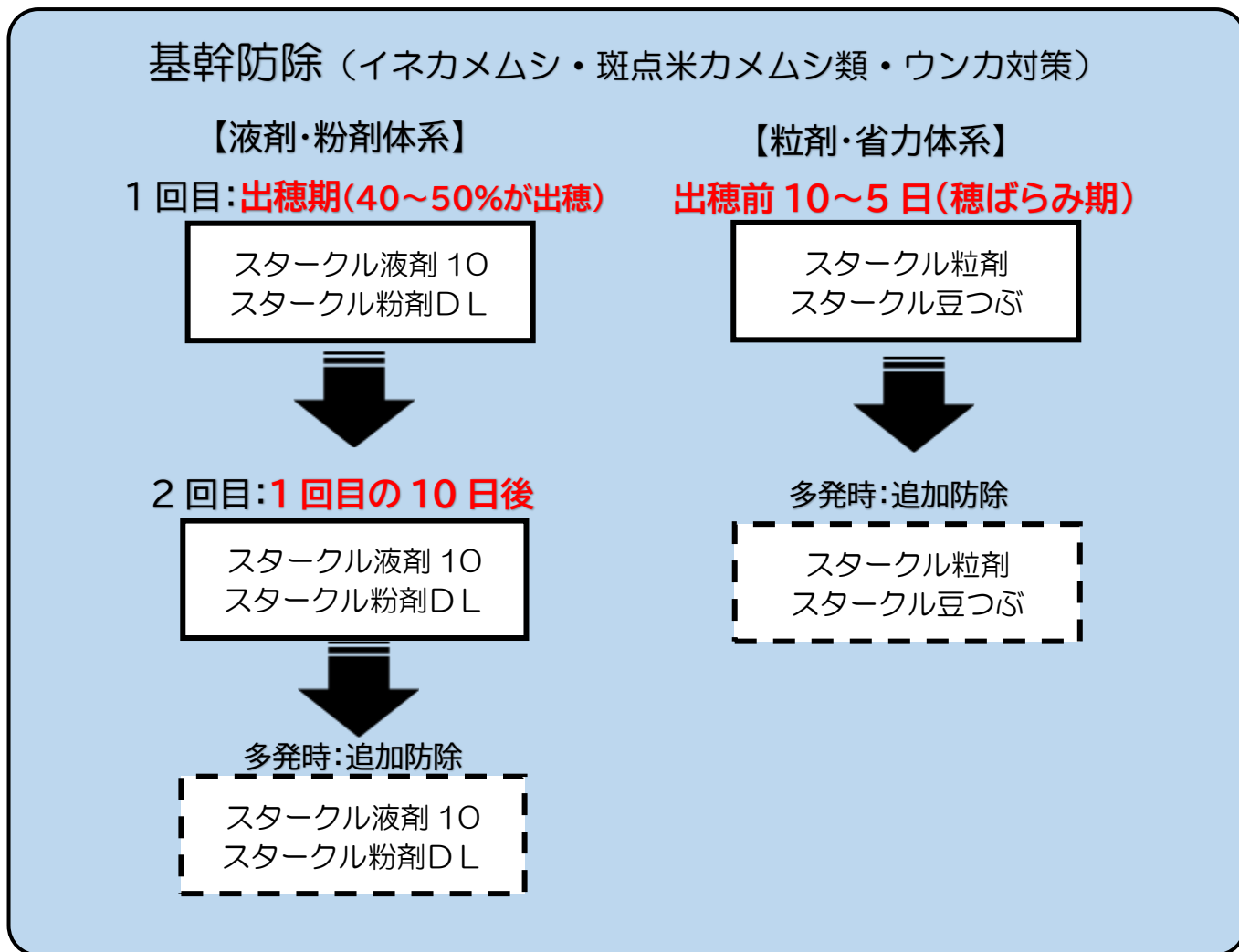
基部斑点米

○イネカメムシの防除適期

薬剤名	1 回目	2 回目
スタークル液剤 10 スタークル粉剤	・ ・ ・ 出穂期 (40～50%が出穂)	1 回目の 10 日後
スタークル粒剤 スタークル豆つぶ	・ ・ ・ 出穂前10～5 日 (穂ばらみ期)	

イネカメムシの防除適期は、斑点米カメムシ類の防除適期より早くなるのでご注意ください。

一般米：「つきあかり」「コシヒカリ」「きぬむすめ」防除体系



☞ 液剤・粉剤体系での防除は 2 回行うことが望ましいですが、「出穂期」の防除を優先的に行ってください。

※いもち病、紋枯病、稲こうじ病など、突発的な病害虫が発生した場合は、補完防除を実施してください。（補完防除薬剤 P11,12 参照）

品種ごとの出穂期の目安

品種	田植日	出穂期
つきあかり	4 月 17 日	7 月 10 日頃
コシヒカリ	5 月 20 日	8 月 1 日頃
きぬむすめ	5 月 20 日	8 月 10 日頃

※日にちはあくまでも目安です。実際のほ場を確認しましょう。

※ほ場の外周部から走り穂が出て、およそ 3～5 日に出穂期を迎えます。

「つや姫」 「きぬむすめ特別栽培米」 防除体系

「つや姫」「きぬむすめ特別栽培米」は、**スタークルを1回のみ使用可能**です。(特別栽培米基準)

基幹防除（イネカメムシ・斑点米カメムシ類・ウンカ対策）（注1）

【液剤・粉剤体系】

出穂期(40～50%が出穂)

スタークル液剤 10
スタークル粉剤DL

【粒剤・省力体系】

出穂前 10～5 日(穂ばらみ期)

スタークル粒剤
スタークル豆つぶ

（注1）「つや姫」は**スタークルを1回のみ**使用可能です。(特別栽培米基準)

トレボンは使用できません。

害虫が多発した場合は営農第一課までご相談ください。

いもち病・紋枯病の発生状況に応じて補完防除を実施してください。

「つや姫」の出穂期の目安

品種	田植日	出穂期
つや姫	4月25日	7月20日頃
	5月4日	7月24日頃
	5月10日	7月27日頃

※日にちはあくまでも目安です。実際のほ場を確認しましょう。

※ほ場の外周部から走り穂が出て、およそ3～5日に**出穂期**を迎えます。

○出穂とは

穂の先端が止葉葉鞘の先端を押し開き、
少しでも抽出した状態を「出穂」といいます。

しゅっすいはじめ 出穂始	田んぼ全体の10～20%の株が出穂したとき
しゅっすいき 出穂期	田んぼ全体の 40～50% の株が出穂したとき
ほぞろいき 穂揃期	田んぼ全体の 80～90% の株が出穂したとき。 通常、出穂期の2～3日後



病害虫防除のポイント

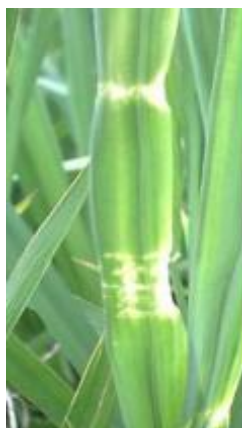
○「イネカメムシ」と「イネクロカメムシ」



イネカメムシ
体長: 12~13 mm



イネクロカメムシ
体長: 10 mm程度



イネクロカメムシ: 葉の被害



イネクロカメムシ: 葉先の被害

「イネカメムシ」: 近年全国的に被害が急拡大しており、6・7年産では斐川地域でも甚大な被害を受けました。雑草を好む斑点米カメムシ類とは異なり、**直接水田に侵入するため、畦畔の草刈りによる予防が困難です。**斑点米を発生させるほか、出穂期に籾の基部を加害することにより不稔粒を発生させるため減収となります。**稲から稲へと移動するため、晩生品種や遅い作型では特に注意が必要です。**

「イネクロカメムシ」: 3年産より斐川町内でも発生が確認され、食害による白穂や株枯れ、不稔粒の増加による減収被害を受けました。**年々、町内の生息地域が拡大しており、畦畔際で被害株を見かけたら注意が必要です。**

越冬成虫が6月頃水田に侵入し、稲の汁を吸いながら卵を産み、幼虫は6月下旬頃より始め、稲の汁を吸いながら8月下旬には成虫となります。

被害は、分けつ抑制・白穂の発生など収量に大きく影響します。

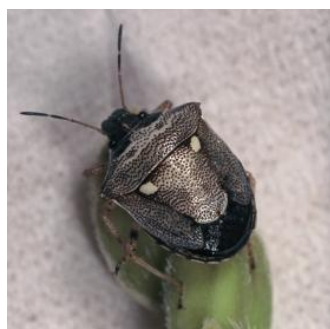
○斑点米カメムシ類



クモハリカメムシ
体長: 16 mm程度



ホソハリカメムシ
体長: 10 mm程度



トゲシラホシカメムシ
体長: 5 mm程度



アサジカスミカメ
体長: 5 mm程度

ヒエが多いと発生しやすく、吸汁被害による斑点米は等級格下げ要因となります。畦畔の雑草で増殖し水田内に侵入するため、**出穂2週間前までの畦畔の草刈りが有効**です。

○いもち病

穂いもちの発生は出穂期の気象に左右されることが多い。
出穂期である7月下旬から8月が低温、多雨の年には発生が多い。
近年町内においても、穂いもちが発生している。穂いもちは減収に繋がるため、防除は葉いもちの発生を抑制することが重要。

置き苗が感染源となっているため置き苗は早急に除去する。

現在栽培されている品種では「コシヒカリ」「きぬむすめ」での発生が多く、昨年もごく一部で穂いもちの多発により減収したほ場が確認された。

箱処理剤が施用できない**直播栽培等で特に注意が必要。**



葉いもち

穂首いもち

○紋枯病

菌核を形成し越冬するが低温にも強いので越冬能力が高い。
このため、発生したほ場では次年産でも発生が懸念される。
高温多湿の年に発生が多く、株元の風通しが悪いと甚大な被害につながる。対策として、

①予防効果のある箱処理剤を選定する

②過繁茂とならないように初期生育を抑制する等がある。

極端な窒素肥料の多用を避ける。直播栽培などで注意が必要。



紋枯病発病株

○稲こうじ病

被害わらや種粃で越冬した病原菌が第1次伝染源となります。

黒い菌核が発生してからの薬剤防除の効果はなく予防防除のみとなる。

発病する条件は以下のとおり

①過去に多発したほ場

②生育後半の窒素が多いとき

③出穂前20日間に低温多雨の気象条件時



稲こうじ病

農薬適用一覧（移植水稻）

【本田防除剤】（殺虫剤）

薬剤名	適用病害虫名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用回数	成分数
スタークル粒剤	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、 イネトヨイムシ、カメムシ類、 イネミスズウムシ	3kg	7 日前まで	3 回 以内	1
スタークル液剤10	ツマグロヨコバイ、カメムシ類、ウンカ類	1,000 倍 60～150L	7 日前まで	3 回 以内	1
	カメムシ類、ウンカ類	300 倍 25L			
スタークル豆つぶ	カメムシ類	250g	7 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類、ツマグロヨコバイ	250～500g			
スタークル粉剤DL	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、 イネトヨイムシ、ニカメイチュウ、 フタオビコヤガ	3 kg	7 日前まで	3 回 以内	1

※「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」は、「スタークル(粒剤・液剤・粉剤・省力)」を1回のみ使用可能です。

【補完防除】

薬剤名	適用病害虫名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用回数	成分数
トレボン粒剤	イネミスズウムシ、イネトヨイムシ、 イネゾウムシ、イネヒメモグリバエ、 イネコ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ	2～3kg	21 日前まで	3 回 以内	1
	ニカメイチュウ第1世代	3kg			
トレボンEW	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネコ類、 イネトヨイムシ、カメムシ類、 イネミスズウムシ、コブノメイガ	1000 倍 60～150L	14 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類 ツマグロヨコバイ	300 倍 25L			
トレボン粉剤DL	イネツムシ	4kg	7 日前まで	3 回 以内	1
	カメムシ類、イネミスズウムシ成虫 ツマグロヨコバイ、ウンカ類、コブノメイガ アザミウマ類、イネコ類、イネトヨイムシ ニカメイチュウ	3～4kg			
	イネヒメモグリバエ、フタオビコヤガ	3kg			
なげこみトレボン	イネミスズウムシ、イネトヨイムシ	水溶性容器 4～6 個(200～300ml)	5 葉期以降 21 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類、ツマグロヨコバイ ニカメイチュウ第1世代	水溶性容器 10 個(500ml)			
	イネコ類、イネクカメムシ	水溶性容器 6～10 個(300～500ml)			

※「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」は、「トレボン(粒剤・液剤・粉剤・省力)」は使用できません。

薬剤名	適用病害名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用回数	成分数
アミスターエイト	いもち病、紋枯病 穂枯れ(ごま葉枯病菌)	1000~1500 倍 100~200L	14 日前まで	3 回 以内	1
	稲こうじ病、穂枯れ(すじ葉枯病菌)、 変色米(カーブリア菌)、変色米(エピコッカム菌)、 変色米(アルタナリア菌)	1000 倍 100~200L			
	いもち病、紋枯病、稲こうじ病、 変色米(カーブリア菌)、変色米(エピコッカム菌)、 変色米(アルタナリア菌)、 穂枯れ(ごま葉枯病菌)、穂枯れ(すじ葉枯病菌)	300 倍 25L			
リンバー粒剤	紋枯病 疑似紋枯症(褐色菌核病菌) 疑似紋枯症(赤色菌核病菌)	3~4kg	30 日前まで	2 回 以内	1
ブラシンプロアブル	いもち病、稲こうじ病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、 内穎褐変病、墨黒穂病、変色米(アルタナリア菌)、 変色米(エピコッカム菌)、変色米(カーブリア菌)、 穂枯れ(ごま葉枯病菌)、褐条病	1000 倍 60~150L	7 日前まで	2 回 以内	2
		300 倍 25L			
バリダシン液剤5	紋枯病、もみ枯細菌病 疑似紋枯症(赤色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色紋枯病菌)	1000 倍 60~150L	14 日前まで	5 回 以内	1 (カウ ント0)
	紋枯病	300 倍 25L			
カスミン液剤	いもち病	1000 倍 60~150L	穂揃期まで	2 回 以内	1 (カウ ント0)

※バリダシン液剤・カスミン液剤は農薬カウント0(「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」で使用可能)

【稲こうじ病防除】

薬剤名	適用病害名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用回数	成分数
Zボルドー粉剤DL	稲こうじ病	3~4kg	出穂 10 日前 まで(※)	—	1 (カウ ント0)
	墨黒穂病	4kg			
ドイツボルドーA	稲こうじ病、墨黒穂病	2000 倍 60~150L	出穂 10 日前 まで(※)	—	1 (カウ ント0)
モンガリット粒剤	紋枯病、稲こうじ病、墨黒穂病 疑似紋枯症(褐色紋枯病菌)、疑似紋枯症(赤色 菌核病菌)、疑似紋枯症(灰色菌核病菌)、 疑似紋枯症(褐色菌核病菌)	3~4kg	30 日前まで (※※)	2 回 以内	1
	穂枯れ(ごま葉枯病菌) 穂枯れ(すじ葉枯病菌)	4kg			

- 1.稲こうじ病は黒い菌核が発生してからの薬剤防除の効果はありません。
- 2.稲こうじ病は防除適期が限られていて、早く散布しても遅すぎても効果が劣ります。
粉剤・液剤(※)は出穂 10~20 日前、粒剤(※※)は出穂 2~3 週間前に散布する。
- 3.銅剤(Zボルドー粉剤 DL・ドイツボルドーA)を使用する場合は、出穂期以降は稲に薬害を生じやすいため、
出穂 10 日前以降の使用は避けること。

【倒伏軽減剤】

薬剤名	使用目的	使用量(10a)	使用時期	使用回数
ロミカ粒剤	節間短縮による倒伏軽減	2~3 kg	出穂 25~10 日前まで	1 回

【無人航空機（ドローン）薬剤】

薬剤名	適用病害虫名	希釈倍数 使用量	散布液量 (10a)	使用時期	使用 回数
トレボンエアー	イナゴ類、ウンカ類、 カメムシ類、コブノメイガ、 ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	3 回 以内
スタークル液剤 10	ウンカ類、カメムシ類	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	3 回 以内
	ウンカ類、ツマグロヨコバイ	16 倍	1.6L		
	ウンカ類	30 倍	3L		
スミチオン乳剤	ニカメイチュウ、カメムシ類	8 倍	0.8L	収穫 21 日前まで	2 回 以内
アミスターエイト	いもち病、紋枯病、稲こうじ病、 変色米(カーブラリア菌)、 変色米(エピコッカム菌)、 変色米(アルタナリア菌)、 穂枯れ(ごま葉枯病菌)、 穂枯れ(すじ葉枯病菌)	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	3 回 以内
バリダシンエアー	紋枯病	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	5 回 以内
カスミン液剤	いもち病	8 倍	0.8L	穂揃期まで	2 回 以内
ブラシンフロアブル	いもち病、ごま葉枯病 もみ枯細菌病、内穎褐変病、 墨黒穂病、稲こうじ病、 変色米(アルタナリア菌)、 変色米(エピコッカム菌)、 変色米(カーブラリア菌)、 穂枯れ(ごま葉枯病菌)、褐条病	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	2 回 以内
ビームエイト スタークルゾル	いもち病、ウンカ類、 カメムシ類、ツマグロヨコバイ	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	3 回 以内

農薬使用にあたっては、必ずラベル表示（使用時期、使用量、倍率、使用回数）を確認し、適正に使用して下さい。

お問合せ先
JAしまね 斐川地区本部 営農第一課
TEL : 0853-73-9616